
弱いからこそ強くなれる！

かみかみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弱いからこそ強くなれる！

【Nコード】

N7277V

【作者名】

かみかみん

【あらすじ】

人生つていうのは予想外の連続だ。だつてさっきまで寝ていたはずなのに気が付いたら……猫ですよ！？そして始まる異世界での俺 in 猫(?)な生活

第一幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

第一幕

ファンタジーな世界というのは誰しも憧れを抱く事があると思う。フとした拍子に読んでいる漫画の世界の主人公に自分を置き換えてみたり、人によってはその想いを物語にしてネット上に掲載する人もいるはずだ。

人は常日頃から軽く現実逃避をする瞬間がある。ストレス社会の中における発散方法の一つといったらそれまでなんだが…

しかし、幾ら憧れを抱こうが、所詮は絵空事。

実際はそんなことが起きるはずがない……と言うのは常識と言っても過言ではない。寧ろ本気にしている奴は少しばかり病んでいる可能性が濃い。

勿論、俺のなかでもそんなことは起きる筈が無いって言うのは常識だったし、そこまで現実を捨て去った覚えもなかった。

さて、聡明な方なら、今し方俺が言った言葉の真意に気が付くことだと思う。

…ん？真意も何も、変なことは言っていないってか？

いやいや、少し前の文章をきちんと一字一句洩らさずに読んでみ。俺はこう言っただ。「現実を捨て去った覚えもなかった」ってね。

つまりはそういう事だ。わざわざ過去形に言い直したんだ。何かあったと言う事は簡単に想像がつくだろう。

……うん、現実逃避はこれくらいにしたいと思います。取り敢えず一言だけ言わせてくれ。

「にーににに？（どうしてこうなった？）」

今の俺の言葉を聞いて今現在俺が陥っている状況をぴたりと答えることができた奴は間違いなく賢者であり、超能力で俺の心の内を読む奴だと思う。

さてさて、先に言っておくが別に街中を歩いていて運転手が居眠りしているトラックにぶつかったり、隕石が直撃したり、美少女に背後からナイフでズドン！……ってされた訳ではない。

俺の記憶が正しければ、例年に見ない猛暑の今年、夏の暑い盛りの昼間にクーラーの壊れた講義室にいた筈だ。決して広くは無いその部屋には学生が100名程缶詰め状態になり、その前では大汗をかきながらもスーツを着ていたバーコード禿の教授が自分の若かりし頃の武勇伝を語りだしていた。

勿論、殆どの学生がそんな話をまともに聞ける状態では無く、うちわを扇いで凌ごうとする奴、誰かれ構わず話しかけて取りあえず暑さを紛らわそうとする奴、耐えきれずに夢の世界へと旅立つ奴。そんな状況下に俺はいた。

そんな地獄ともとれる暑さの中、昔の武勇伝を聞かされても得なんて無いと判断した俺は熱気で温められて不快感の塊へと変化した机に突っ伏して夢の中への逃避を行ったというのは覚えてる。

まどろむ意識の中、額を汗が伝っていく嫌な感覚と講義室に響く教授の声が段々と遠ざかっていくのだったってなんとなく覚えてる。そしてふと気が付いたら……

「にに？（毛？）」

なぜ毛？しかも、人が有する様な薄い毛じゃなくて結構濃

い毛だし。更には何だか銀色っぽい。 いや、そもそもなぜ知らぬ森の中？ 此処日本かよ？ っていうか、今更ですが何で俺の身体にこんなに沢山の毛？ いやいや、それはさっき考えたから。

こういうのって一度死んで生まれ変わりましたってネタは幾分か聞いたことがあるけれど、俺寝てただけだし！ 寧ろ、そもそもすぎて何に突っ込んで良いのかすらわからねえ！？

いや、少し待て俺。この毛は間違いなく動物のソレ！ つまり、何かの動物になっちまったという事か？ つまりはテレビを見ることも出来なくなっ手なんか肉球なんだからゲーム機すら持てなくなっ…… ああ… 折角始まった連ドラも殆どみれてねえ… あああ！ しかも、先週買ったばかりのゲームを全然プレイできてねえし！

…… 人間ってあれだな、あまりにも常識はずれな事が起きるとマジで混乱して訳の分からん事を考え出すもんなだな。

今まさに現在進行形でソレに直面している俺だからこそ吐ける言葉だなコレ。

と、取りあえず少し落ち着け俺。冷静になるんだ俺。自分でも言っていたではないか。俺は確か大学の講義中に居眠りをしちまつたんだ。だったらこれは夢と言う可能性が半端無く高い！

だってそうだろう？最後の記憶が居眠りした所で終わっていて、気が付いたら動物だぜ？

…… しかし、そんな俺の淡い期待も数秒後には『疑問』という無常な言葉に姿を変えていった。なぜなら

ザーザー！

ザーザー！

「……にい（冷たい）」

突然降りだしてい待った豪雨とまではいかないが、それなりに勢いのある雨が俺の体に直撃しているからだ。そのせいで徐々にだが冷えていく俺の体……

……夢の中で雨？ しかも冷たいとか感じるだって？ 本当にコレって夢…なんだよね？ と、取りあえず、仮に夢だとしても雨に当たっているという不快感MAX状態を脱する為にも雨が凌げそうな所を探したほうがいい。

そんなこんなで俺は雨が凌げそうな場所を探す為に歩き始めたのだった。

・
・
・
・
・
・

さて、何だかわかんねえけれど横穴があってラッキーだったぜ。

取りあえず、雨風を凌ぐために其処ら中を歩いていると割と近くに良い感じに掘られた横穴を発見した俺は直ぐ様そこにかい込んだ。すっかりあれだね。動物になったって事だから二足歩行じゃなくて四足歩行での移動だったんだけど、思いのほか四足歩行って簡単だったな。だって、歩き始めなんて四足歩行だって言う事を忘れてしまう位自然な歩き方だったんだぜ？

……そんな別の事を考えて気を紛らわせることよりも、今は状況の判断の方が先だと思う。

さて、仮に今俺がいるこの世界を夢だしよう。この一言で片付いてしまえばどれだけ楽なのだろう。

だって、後は眼が覚めるまで待つていればいいのだから。しかし、それは先程の雨の冷たさから薄まってしまった。夢である以上、視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚のうち視覚・聴覚以外は殆ど無いものと言ってもいい。…いや、正確には五感全ては無いんだが、この二つは想像でどうにでもなる。

ソレを踏まえて俺の状況だ。先程の雨の冷たさ…さらに毛越しではあるが雨粒が身体に当たる感覚、更には歩いた時に感じた足底に感じた地面を踏みしめる感覚。どれも夢からは考えられない感覚だ。これだけでも、夢である可能性は低い。更にもう一つ言うと、夢と言つものは寝ている間に記憶の整理をする時に現れるものである。其処には自分の意思は殆ど無く、自分でソレを夢だと認識する事はほぼ無く、自由に動き回れることもまず無い。しかし、今の俺はどうだろう？自分の意思はハッキリと保つことができ、更には……

ヒヨイ、ヒヨイ

俺は前足を少し上げて、犬の「お手」の様なポーズを取った。

このように手足も自由に動かす事が出来る。……この時点で「夢」という選択肢はついていたと言ってもいいだろう。

さて次の仮定だ。俺が何らかの「動物」になった。

……うん、どういう経緯でこうなったのかは分からないけれど、これを事実とした場合が一番しっくりと来る。

感覚があるのも今俺がいる世界が現実だということがわかるし、俺⇨動物になったと考えるのが妥当なのかもしれない。

残念すぎる答えだが、それが答えである可能性が一番高い。しかし、だからこそ疑問に思えることがある。

色々と世の中の摂理云々をぶっ飛ばしまくっているが、なぜ人間の俺が動物に変化しているかということだ。

そこでふと、先程まで考えていたファンタジー的な言葉を思い出した。

『転生』

仮にこの一言で解決できるとしたら、ある程度の辻褄は合う。講義の最中、何らかの理由で死んでしまったと仮定する。……仮定したくは無いが。

と、取りあえず、転生というものが本当にあるとしたら、それに俺が当てはまったと思えばいい。

むしろそれ以上の応えは今の俺には出す術はない。

自分が死んだかもしれない…その言葉自体は割りとあっさり受け取ることができた。

そもそも、将来のビジョンも何も無くただ単に大学生活を送っていた俺からしてみたらお先真つ暗な世界に大きな未練は残していない。…いや、家族とか友達とかは未練タラタラだし、見たいテレビもあるしゲームだってしたい。

だけれど、それ以上に生きる事にさめてしまっている自分がいた。それは紛れもない事実だ。

あと数ヶ月もしたら就職して生きるためにセカセカ働き通していき人生だった。…いや、周りはそうかもしれないけれど、少なくとも俺の就職は未だに決まっていなかった。そんな中でもあせる表情

することなく淡々と毎日を過ごしていた俺だ。いつかは潰れていたと思う。

だったら訳の分からないまま始まった俺の第二の人生を楽しむべきではないだろうか？ 人間でない以上、働く必要は無いし、食べて寝て食べて寝てを繰り返す日常を送ればいいのだから。…いや、それは幾らなんでもないか。

どのように生きていけばいいのか分からないのは現在も一緒かもしれない。人が住んでいる気配ゼロの森の中にある洞穴で雨宿りをする俺。食料はどうすればいいのか？仲間とかはいないのだろうか？俺がなっているこの動物は何なのか？この森には天敵はいないのか？

さまざまな事が俺の頭を過ぎって行く。何となく自分の手…いや、前足に目をやる。そこには突っついてみたくなるほど小さくて可愛らしい肉球がある。しかも、小さいながらも人の皮膚なんかは簡単に切り裂く事が出来そうな鋭い爪が見え隠れしている。

比べるモノが無いからどれくらいの大きさは分からない。前足から視線を外して今度は洞窟内を見回してみる。今の俺の体がどれくらいの大きさなのかは分からないが、人間の視点寄りには間違いないくらい低い。更に言うのであれば、その辺に生えている雑草にも背丈は負けている。

考えたくは無いが、見た所犬と言うよりも猫に近い丸みを帯びた俺の手^{前足}そして、明らかに小さすぎる俺の視点の高さ。

……つまり、猫になった可能性が一番高いという事だ。

いや、だからこそ分からない所もある。俺の記憶が確かならば猫とは母猫が付きつきりで世話をする動物だと認識している。いや、猫だけでは無くネコ科に属する動物は勿論のこと、寧ろ哺乳類のほとんががそういう生態の筈だ。

しかし、俺の近くには母と思われる動物の存在は認めていない。それどころか、俺以外に動く影と言ったら雨風によって不気味に揺

れている木の葉と雑草ぐらいなものだ。

簡単に考えたら殆どの動物が何処かに身を潜めて雨宿りをしているのだらう。結構強い雨だ、下手をすれば低体温症なんて者も考えられる。そうなたら野生の動物では命にかかわる可能性だってある。

実質、俺の小さな体は少し当たった雨の所為で大分冷え切ってしまっている。意識はしていないが足なんかは結構振るえている状態だ。最も、直ぐに洞穴に入ったおかげで幾分かは身体が暖かくなってきた。

……クウ

そんな時、洞窟内に何やら可愛らしいくもった音が響いた。決して大きくない音であったが、雨音以外の音は以外と響くものであるようだ。一瞬、別の生物がいるのかと思いい洞窟の奥へと慌てて顔を向けた。しかし、直ぐにその音の発信源が何処だか理解した。

「に……ににい（腹……へった）」

まさかのまさか、どうやらこの小さな俺の腹から発せられた音のようだ。ソレを理解した瞬間、言い知れぬ空腹感が俺を支配した。

赤ん坊と言うのは思いのほか腹が減るのは早い。どうやら、ソレは人間だけでは無く他の動物にもいえることなのだらう。少なくとも俺がこの体になってから、一時間は経っていない筈だ。この体になった瞬間は少なくとも空腹感を感じていなかった。つまり、この一時間でお腹がすぐ程、燃費が悪いという事……

弱った、果てしなく弱った。この体の子猫である以上、主食となる者は母猫の母乳だらう。最も、俺がソレを素直に飲むかは別なんだが。俺だって記憶上、数十分前まで人間だった記憶がある。

ソレがすんなりと猫化してたまるものか。

これが人間の赤ん坊になったら、まだ人間の母乳と言う事で少しは譲歩できたが、何が悲しくて動物の母乳を飲まなければいけないのか。それだったら、その辺の水を飲んだ方がましだ。

さて現実問題、腹が減った俺が何を食せばいいのかが問題だな。母猫がいなくて、さらに母乳を飲みたがらない俺。要は、ソレに変わる食べ物を調達しないといけないという事だ。

そういえば、この体は離乳期を過ぎているのだろうか？ 離乳期を過ぎていなければどんな食べ物だって消化不良を起こして吐いてしまう。

まあ、物は試しだ。猫って確かライオンやチーターと同じく肉食だった覚えがある。あるいは、魚を喰えて走っているイメージもある。仮に動物の肉を食する場合は半端ない覚悟が必要だ。さっきまで人間だった俺に生き物を殺して食べるなんて覚悟が果たしてあるのか？ こうやって言葉にして言うのは簡単だが、普通に暮らしていた奴には結構、酷な作業だ。ソレに根本的にハンティングなんてものはやったことがない。

その点、魚の場合は生で食べるという世界的に見ても稀な食文化をもつ『日本人』だった俺からしてみたら罪悪感という観点から言う、肉を食べる事よりも幾分か低い。

それに、元々俺は肉よりも魚派だ。しかも、好物は魚の刺身ときている。最も川魚の刺身は残念ながら食べた事は無いんだけれど……

しかし、今は四の五の言っている時ではない。正に文字どおり生きるか死ぬかの選択肢に近い。

そうと決まれば、早速行動に移してみないといけないんだが……

ザーザー

相も変わらずの大雨の前で断念せざるを得ない状況であった。

それに、よく考えたらどうやって魚を捕るんだ？

釣竿はない、あつても持てない。素手で捕る技術なんてあるはずもない。

……あれ？ もしかして積んだのか？

いやいや、少し待て

よ俺。この体は猫（？）と言えども頭脳は元・人間なんだ。こういう時こそ頭を使うんだ。

この体は可愛い猫（？）なんだ。もしかしたら人里で餌付けをしてもらえる可能性がある。……しかしながら、この森の中を空腹状態で尚且つ豪雨という悪条件真っ只中を何処にあるかも分からない人里を探すのは流石に無望か……それに、此処が日本とは限らない。下手をすれば海外の樹海のと真ん中という可能性だってあるんだ。うん、この案は却下だな。

さて、次は野良っぽく残飯を食ってみようと言う案だが……これは有無を言わずに却下の方向性で。

必要に刈られたらやるかもしれないが、流石にこの案に縋っては生きていたくないかな。

・ ・ ・ ・ ・

……ふう、色々と考えたがごとく却下な展開になったな。

しかし生きていく以上、何かを食べなければ餓えて死んでしまう。いつそのこと、その辺に生えている植物でも食べてみるか？ ……

…いや、これは一番やつちやいけない選択肢の筈だ。猫にとって植物は有害なものばかりだと何かの番組で見た覚えがある。

……こうなったら一番は魚、よくて肉、餓死寸前になったら昆虫などで手を打つ事にしよう。幸い、ヘボ（蜂の子）やイナゴは爺ちゃんや婆ちゃんの影響で、それ程嫌悪感はない。でも、出来ることなら人らしい食事がしたいぜ。

そんな事を心の中で一人愚痴りながら俺は食糧を求めて洞窟の奥へと足を運んだ。洞窟内はひんやりとはしていたが、決して寒いという事は無く快適な温度を保っていた。しかし、その分何故だか湿度が異様に高いと感じられる。つまり、この洞窟の中に水に関する何かが存在するということであろう。

もしかしたら地底湖か……いや、もしかしたら海に繋がっている可能性だって否定できない。自分が生きる為に食料を調達する為に洞窟内を一人進んでいるが、まるで『冒険』をしているかのような気分になり少しだけテンションが上がってくる。

しかも、洞窟内は暗かったが俺のスペックが猫に変化していることもあり夜目がきいていた。更に、時折外に繋がっているような穴が天井に開いていたため、難なく洞窟の奥へ奥へと進むことができた。

時間にして2時間程歩いただろうか。俺の進む足が止まった。別段空腹が限界値を超えた訳ではない。ただ単に洞窟の最深部にたどり着いてしまっただけである。その間、湖などは存在せず辺りはジメジメした壁だけであつたが、最深部は如何やら勝手が違っていたようだ。

まるで人が作ったかのようなドーム状にひらけている。しかも、今まで歩いていた所とは違い、完璧に外界と接触する部分は存在していない。しかし、どういふ訳かこの中は闇に支配されていない

のだ。

原因は直ぐに分かった。専門的な事は詳しくないが、ドーム内の至る所に薄らと青く光り輝く鉱物が存在していたのだ。

漫画やゲームなどでは幾度となく存在する魔鉱石のようなものと第一印象で感じてしまった俺は途轍もなくロマンもへったくれも無い人種かもしれない。

しかし弱った……俺はこの洞窟内を観光しに来たのではない。

食料を求めてきたのだ。だが、この洞窟内には猫が食べられそうなものは何一つ存在していない。

キュウーグルル……

大した働きもしていないのに自己主張ばかり強くなっている自分の腹に少しだけ苛立ちながらも俺はドーム内を食べられるモノがないかを必死になり探りまわった。しかし、ドーム内にあるものは岩壁と光り輝く不思議な鉱物だけで、俺の食べられそうなものは存在していない。

この際、なりふり構っていられないと持てそうな小さな石をひっくり返して虫が居ないかも確認した。しかし、結果は残念なものであり、俺以外に生命活動をしている姿を確認する事は出来なかった。

如何やらこの洞窟には食べ物も存在していないようだ。散々な結果に軽く目眩を起こして倒れ込みそうだったが、其処は気合で自分の足を奮い立たせて地に足を付けた。

しかし、そこで新たな問題が発生してしまった。俺は此処に来るまでに2時間以上洞窟内を歩き続けたのだ。さっきまではある程度の余裕があったが、空腹が結構限界まで来た俺に果たして戻りだけの体力があるのだろうか？新たに直面した問題に今度こそ目眩を起こして地面に転がろうとしたが、その時俺の視界にとある

ものが入ってきた。

別だん見慣れないものではないし、今まで何度も見てきたものだ。しかし、だからこそこの場に会ったら限りなく不自然なものである。寧ろ何故今の今まで気がつかなかったのかが不思議に感じるものである。

「……に？（扉？）」

一枚岩を削って作ったであろう、俺の視界には重厚な出来の岩で出来た大きな扉が入ってきたのだ。

第一幕（後書き）

読んで頂きましてありがとうございます。

この話は以前から考えていたもので、掲載する予定は無かったのですがリハビリ的な意味で掲載していきます。

当然の如く更新速度は遅く、二次創作の方を優先して書いて行きますので、偶に覗いて頂けると光栄です。

第二幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので
す。

第二幕

人と言う生き物は何か未知なものが眼前にあると2パターンの行動に移るものである。一つは未知なるものに対して恐怖し、深く関わろうとしないタイプ。そして、もう一つが……

「……ににに……にに？（……なんだ……これ？）」

ただひたすらに己の欲望のままに動いてしまうタイプである。こういうタイプ分けは後々にその人の生活に大きな影響を残す。

前者のタイプは企業に就職した後、出世もある程度して普通に暮らしていくタイプ。後者のタイプは自分から会社を興して大成功を収めるか、身の破滅を呼ぶタイプ。

大まか過ぎるわけ方ではあるし、そもそもこれ通りに当てはまらない人間だっている。そして、この人間から猫（？）になってしまった男は限りなく後者のタイプであった。

これ以上何にも失うことのない恐怖感諸々が無いこの男にとってその先になにかがあるかもしれないその扉は自身の好奇心を刺激する分にはちょうどいいものであった。

足元を少しふら付かせながらもその扉に近づいて行く見た目子猫の男。その視線はまるで魅了されたかのように扉を一身に見つめている。内なる思いはただ一つ。

「に……にににに？（飯……あるかな？）」

とにもかくにも自身の空腹を満たす事のみである。恐らく今の彼の目の前に何かしら自立で動くものがあれば、それがたとえ見た目がグロい芋虫であろうと強靱な皮膚を持つ巨大な草食獣であろうと、明らかに食物連鎖が逆転しているであろう凶悪な肉食獣である

うと分別なく嚙り付いている事であろう。

そして、彼は扉の前に到着した。 いざ目の前に来ると、遠目で見た時よりも重厚で凶悪さが伝わるような程、頑丈に出てくる扉である。 岩で出来ているが、恐らく核でも打ちこまれない限りはこの扉が破壊される事は無いという考えが一瞬だけ頭をよぎったが、その考えは直ぐに捨て去り、扉の向こう側へ向かう為に更に近づく。 幸いなことに扉は閉まっておらず、子猫の身体を持つ彼ならばなんとか通る事が可能な位、凡そ10？弱の隙間が開いていた。 ある意味で幸運とも取れる事ではあるが、そんな状況は今の彼にはどうでもいい事であり、通る事が出来るのなら通る。 と言う考えしか浮かばない状態であった。

少し狭くはあるが、隙間を難なく通りぬけた彼は小さな部屋へと入った。 先程の部屋とは違い、光る鉱物もなく外への亀裂などもないその部屋は人間の目から見たら暗闇であっただろう。 しかし、猫へと変化した彼の眼は僅かばかりの光により少しずつではあるがこの部屋の全貌を確認できるようになっていた。

凡そ十畳の狭い空間であるそれは、先程のドームよりも明らかに異質であった。 まず、今の岩の扉自体も自然に作り出されたものではないという事は分かる。 幾ら彼が空腹で混乱しているとはいえソレは分かる。 しかし、それ以上にこの部屋は何かがおかしいのだ。

「にに…にに…にににに？（剣…鎧…人間がいたのか？）」

そう、其処には何処の誰が装備していたか分からない剣と鎧が飾られていた。 白銀に輝く鎧、更には金の装飾がなされたおとぎ話に出てくる魔王を打ち滅ぼすとされている『聖剣』を彷彿させるかのような剣…… そう言った剣などの武器に関しては全くの素人である彼ではあるが、そのあまりの神聖さに暫し心を奪われ、呆けた表

情でそれらを見つめていた。

時間にして10分程であろうか、彼はふとした拍子に我に返った。確かに空腹ではあるが、それを思い出したためではない。……いや、確かにそれには関係している事ではあるが、ある意味でも自身の五感が鋭くなった為に感じたものだと思う。

「ににに……にに？（甘い……香り？）」

鼻腔から入った匂いは確実に空腹である彼の胃と脳を刺激した。しかし、こんな洞窟の奥深くで何故甘い香りがするのか疑問ではあるみたいだが、そんな事は最重要事項（空腹）に比べたらどうだっという情報である。

彼は慌てて狭い室内を見回した。十畳という狭い空間の中央には剣と鎧が飾られている。一見するとそれ以外には何も無いように見えるが、それは違うと彼は直ぐに判断した。鎧に隠れて死角になっではいるが、その先……鎧の後ろ側にはまるで祭壇の様なものがあつた。何を祭っているのか、はたまた何かを封じているなど様々な憶測が脳内に手飛び交うが、其処に彼の目当てのものはあつた。お供え物だろうか？ 祭壇の中央の高さが20？程の壺の様なものから甘い香りは漂ってくる。

「にににに！（食いもんか！）」

彼は先程までのヨロヨロの足から打って変わり力強く地を蹴り、丸でとび跳ねるような勢いで祭壇へと飛び乗った。祭壇の高さは1m以上ある場所にある。しかし、彼は子猫がその高さを一気に登るという異常さには運がいいのか悪いのか、この時は気付かなかった。

そんな事は露知らず、彼は躊躇無くその壺の蓋を肉球のある両手で器用に開けた。

「……にに？（……飴？）」

開いたその中には何故かビー玉を思わせるような透きとおった丸い物がゴロゴロと2、30個はあるだろう。……まあ、確かに食べ物には違いない。しかし空腹の彼にとってはある意味で絶望に近いだろう。空腹でやつとの思いで見つけた甘い香りが全て飴玉だとわかったら。そんな中彼はと言うと……

「にににに（取りあえず食うか）」

……まあ、中には例外もいるという事で。彼は壺に頭を勢いよく突っ込むと、勢いよく飴玉をかじり出した。飴玉は意外と脆いみたいで、子猫である彼の顎の力だけで難なく噛み砕かれていく。ただ、飴玉だというのに……甘い香りを発していたというのに……いざ食べてみると全く甘くないのは何故だろう？ と呟いた彼の声は真っ暗な部屋の中で『にー』と可愛らしい鳴き声と共に響いていた。

「味……殆ど無かったじゃねえか」

まあ、ある程度空腹が満たされたから良かったけどよお。そういや、食べてから気が付いたんだが猫って飴玉食べても大丈夫な動物だったか？ ……やめよう、食べて体調を崩したらそこまでだし。

そんなことよりも今は空腹がある程度まで満たされた事を喜ばない。

「さて、今からどうするか……ん？」

……あれ？ 何かが変だ。 だけれど何が変わなんだろう？ 視線の高さは変わっていないし。

自分の前足を見てみると先ほど見た銀色の小さな猫っぽい前足がある。 つまり、身体的なものは変化している訳ではない。

「だったら何が……うん？ 何だろう……話したら途轍もない違和感がある……
って俺、言葉話してねえか！？」

違和感の正体には以外と直ぐ気がつく事が出来た。 だって、つい数分前まで『にー』しか話せていなかった筈の俺が気が付いたら言葉を話しているんだぜ？ まあ、どちらかと言うと『にー』って話していた時の方が一番違和感があったもんだから元に戻った為、気がつかなかったのだろう。

しかし、これはこれで弱った。 そもそもその要因が全くもって不明だが、話す猫だなんて明らかに人に見つかったら珍獣扱いされてしまう。 ……いや、今の時代話す猫とか犬とかはテレビに出ている時代だ。 もしかしたら、俺もそんな中の一員に。

・
・
・
・
・
・
「無理だな」

今軽く想像してみたけれど、間違いなく俺みたいに流暢に話す動物がいる筈がない。

しかし、これからの事を考えると頭が痛くなってくるが、こうなってしまった以上、前向きに考えなければいけない。どんな因果が分からないけれど、話す事が出来るようになった以上、これを頑張ってプラスに働かせるようにしては……それに、ここで泣きわめいた所で元の生活に戻るかと聞かれたら限りなく皆無だ。

そして、このまま絶望したまま死ぬという最悪な選択肢をチョイスしてしまったらそれこそ命に対する冒瀆である。

だったら、この猫(?) ライフを目一杯楽しまなければ損だと思う。俺は無理やりにも自分にそう言い聞かせて洞窟の出口を目指して歩き出した。

第二幕（後書き）

ありがとうございました。物語を書くにあたり、初めて三人称を行ってみました。難しいものですね。どなたか、コツなどを教えて頂けると幸いです。

では、感想&ご意見はいつでも受け付けております。

第三幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

第三幕

よお、俺だ。あの飴玉を食ったあと、俺は洞窟の入り口まで戻ったんだ。なんて事はない。ただ、雨が止んだかを確認するためだ。俺は行きの時とは何の変化も無い洞窟を戻って行つた。洞窟の隙間から差し込む光は行きの時とは違い少し赤みを帯びている。

日が傾いてきたのだろう。それに、先程まで聞こえた雨の音とかは聞こえなくなっている。

恐らく、先程の雨はゲリラ豪雨と言う奴だったんだ。いやはや、直ぐ止む雨だったら洞窟の入り口で待っていても良かったな。

少し悪態をつきながら俺は歩みを止めることなく洞窟を進んだ。そうして気がつくと俺は先程まで居た洞窟の入口に立っていた。

……何故だろう洞窟の最深部から入り口まであまり時間がかからなかった気がする。俺の勘では行きで2時間掛かっていたのに、帰りは30分位に短縮した様な気がする。それに、同じ距離を歩いたのにあまり疲れを感じていない様な……それに、飴玉しか食べていないのに先程まであった空腹感が嘘のように消え去っている。

まあ、あくまでも俺の感覚だが。

……うん、難しいことを考えるのは後回しにして今は、

「 寝よう」

全てを考えるのは明日だな。うん、そうしよう。もしかしたら無いと思うけれどすべて夢落ちという最初に捨て去った仮説が正しいのかもしれないし。

少し現実逃避をしながら俺は洞窟の入り口で丸くなり、意識を手放すのだった。

「う、うーん……………身体痛てえ」

翌日、俺を起こしたのは誰かの声でも光でもなく体中に広がる痛みであった。まるで筋肉痛を酷くさせたかのような痛みが俺の体を支配する。

ギギギと擬音がつきそうなほど軋む体に鞭を打って無理やり体を起こした。

「…………あれ？　なんだか昨日よりも視点が…高い？」

そのとき、昨日と比べて視点の高さが違うことに気がついた。昨日は地面ギリギリの高さに視点があったと思うのだが、今日は明らかに昨日よりも視点が高い。大体、自分の部屋のシングルベッドに寝転んだときの視点の高さくらいに感じる。

若干、昨日とは違う様子に疑問を抱きつつも俺は洞窟の外を見た。太陽はすでに昇っており、森の中に木漏れ日が差し込んでいる。どうやら、昨日の雨も夜のうちに上がったみたいだ。

そう結論付けた俺は筋肉痛のような痛みにこらえながらも洞窟の外へと歩き出した。別段、腹が減ったとかは無かった。しかし、その分かなり酷い喉の渴きを覚えたためだ。

それに、残念ながら最後の希望であった夢オチは無くなった。…
…まあ、最初から当てにはしていなかったけれど。

兎に角、この地で暮らしていけないといけなくなったんだ。水場を探しながらこの辺の地理を覚えること位しておかないと最低限生

きていけない。　つーか、ついでに猫（？）になつた俺の食料も探しておいたほうがいいかもしれない。

そう結論付けて俺は歩き出したんだ。　だけれど、そこで一つ問題が生まれた。　さっきも言ったが、何故だか俺の体全身は筋肉痛のような痛みで思うように動かず、一歩一歩出す脚も自分の足ながら少しおぼつかないんだ。

しかし、ここで歩くのを諦めてしまったら必要最低限、生きていくための知識すら得ることができない。　明日やればいいと思うかもしれないけれど、昨日みたいに雨が降ったら何日も動けなくなるかもしれない。　そうなったら、水には困らないけれど餓死コースまっしぐらだ。　流石にそれは御免被^{ごめん}りたい。

痛む体に鞭を打ちながら俺は確実に一歩一歩確実に脚を出して前に進む。　その度に全身を剣山で刺されるような激痛が襲ってくるが、それは精神力でカバーだ。

もちろん今いた洞窟の場所を忘れないように頭の中でマッピングしておくのも忘れない。　こう見えても俺はマッピングとかは得意なほうなんだぜ。

……でも、もし間違えると困るからな。　一応その辺に生えている木に傷をつけて……と……ッ!?!?

手ごろの木に傷をつけようと俺は爪を立てて木にあてがった。

そしてその瞬間見てしまったんだ。　……俺の前足が昨日よりも確実に大きくなっているということに。　俺の記憶が正しければ昨日の前足は丸く、子猫のような小さくかわいらしい手だった。　しかし、今の俺はどうだ？

「　　おいおい、明らかに動物園で見たライオンみたく凶暴な前足に変化しているんだけれど……」

毛に覆われた皮膚から嫌な汗が吹き出てくるような感覚が体全身を駆け巡った。

「そう言えば、昨日より視点も高くなっているんだっただよな？ …… たった一晩で成長したっていうのか！？ …… ま、いつか」

うん、子猫のままだと色々大変だし別に問題なくね？ それに人間から猫になるって言うわけのわからん事態に比べたらそれほど驚くようなことじゃないしな。

俺は急激な生長のことについては深く考えることなく、木に傷をつけるべく腕を軽く振るった。

メキ…メキイ……バキバキバキイ

イイ！！！！！！

「……え、何これ怖い」

その瞬間俺は凍りついた。

「木……折れちった」

いやいやいやいや！ 折れちったじゃねーっての！！ なんだあこの木？ もしかして枯れきっていてものすごく脆い木だったとか？ しかし木の断面図を見ると、途中まで鋭い刃物で切断したかのような滑らかな切り口になっている。

どんなに控えめに考えても誰かが途中までこの木を切ったというのがわかる。

「……なんか、一晩ただけで色々つぶつとみ気味に進化しているなあ」

自分自身に言いしえぬ恐怖を抱きつつ、俺は前足に目を向ける。そこには、相変わらず数分前に確認したとおりの肉食獣を思わせるかのような凶悪な爪がある。

しかし、どんなに考え込んだとしても現状に変化が起きるわけではない。

俺は心のなかで盛大なため息を吐いたのち、再び水場を探すために先程よりも重くなった感じのする前足を動かすのであった。

洞窟から出て一時間程経過しただろうか。今日一日は食糧や水を調達するのに費やすであろうと考えていた俺の予定は早くも良い方に崩れ始めていた。

「うお……コレまた綺麗な湖な事で」

俺の眼前には今迄写真でしか見たことが無い様な綺麗な湖が広がっていた。森が開けたそこは、規模としては野球のドームくらい大きさであろうか。その水は限りなく澄んでいて、淵から湖底をのぞき見る事が出来る程である。そして、中には色とりどりの魚がいるのも確認出来る。

どうやら、此処にいれば飲み水には困らないだろう。魚は……いるのは確認出来るけれど、獲る手段はそのうち考えとしましうかね。

取りあえず、渴いたのを潤す為に俺はさっそく湖の傍まで行き舌を使って器用に水を飲み始めた。何だか普通の水だって言うのに、やけに美味しく感じられる。やっぱり、そのモノに飢えていると得た時の満足感が半端無く大きくなるんだろうな。

勝手に自己解決した俺は、一心不乱に水を口へと運んでいく。

そっぴや知っているか、猫って自分の舌を水面に叩きつけて跳ねた水を加えるんだってさ。前に動物の特番で見たんだよ。それで、俺も試してみたんだけど、身体が猫だからか分かんないけれど、すっごく簡単に出来たんだよね。……うん、軽く人間から遠ざかっている感が否めないけれど俺は気にしないぜ！

口を少し止めて自分の状態に嘆く。しかし、幾ら考えても考えはまとまらず、正に堂々巡りな考えになってしまっ。

ふと、湖面に映った自分の姿に目を見張った。毛の色は前足と

同じで銀色一色。耳はピンと立っていて顔の輪郭は猫だけあって、やはり丸っこい様な印象を受ける。

そしてその顔には……

「なんだこれ？ 模様のように見えるけれど……」

丁度、額にあたるところだろうか、ローマ数字が幾つも重なった様な妙な模様になっている。……しかし、模様って言うよりも入れ墨に近いなこの形は。

「つくづくワケのわかんねえ体になってんな」

しかも、この顔の猫って見たことねえんだけれど？ 銀色の毛色をした猫って……灰色なら何種類か知ってたんだけどな。あれか、俺が知らない品種か何かか？

ガサガサ……

その時だ、妙な気配を背後から感じたのは。猫になった所為で気配には敏感になってきているみたいで、後ろの妙な気配の様子が手に取るように脳へと伝わってくる。

しかし、俺に対しての敵対心は無いように感じる。って言うか、俺の第六感が正しければ俺には全く気が付いていないと言った感じであろうか。

まるでこの二つの気配が喧嘩しているような……そう、言うのであれば俺は蚊帳の外と言った感じであろうか。まあ、俺に対して不利な状況に働かなければそれで良いんだが、もし俺と言う存在に気がついて危害が加わる様だったらソレはそれで困る。

俺は猫にデフォルトで備わっている隠密スキルを（感覚的に）フル活用してその気配がする方に近づいて行った。

傍まで行くと誰だかわからないが言い争っているように聞こえる。片方は男でもう片方は女であろうか？　って言うか、この姿になって初めて言葉が通じる相手を見つけたんだけれど！

あ……だけれど、口論している最中に俺が割り込んだら『何コイツ？　マジKYじゃない？』とか『何だか美味そうな猫だな。よし、今日のランチはコイツに決めた！』とかになったら最悪じゃないかな？

……うん、もう少し様子を見るとしよう。そう結論付けた俺は茂みに身をひそめながら声の主たちが見える位置へと移動した。

「だからいい加減、鬱陶しいって言ってるのよ！」

「キキキキくくく々の獲物を取り逃がしてたまる力！」

……うわ、何このカオス？　余りの訳のわからん光景に一瞬だけ俺の意識がふゆふちやりんぐわるどしかけたぜ……自分で言っていて意味の分からん言葉だけれど。

と、取りあえず俺の目の前に起きている状況について説明しようと思う。

まず女の声の主だ、俺は始め人間だと思っていただけで、ソレはテンで違ったみたいだ。　なんと女の声の主は今の俺より小柄な体系の茶色い毛並みをした犬だ。大体、動物園で見る狸くらいの大きさだと思ってくれて構わない。……いやいや、何で犬が喋ってんだよ！？　どこのわんわんストーリーだったの！！

……あ、状況からしてみたら俺も同じか。

少しばかりトリップしていた俺は直ぐ様意識を戻して男の声の主

を見た。

……そんなもって、男の声の主なんだけれど此方は人間か獣かと聞かれたら人間に近いんだが……いや、人間には分類しちやいけないただけどさ。だって、体長が1m位の小柄な奴で、耳の先っぽが鋭く尖っている。もう既にこの時点で人間では無い。更に目を引くのはつるつばげな頭と人間にしては濃すぎるダークブラウンの体色。そして、真紅に燃える白目の無い目玉、手には刃こぼれしまくりのナイフが一振り……え、どこのゴブリンですか？

どうやら話を聞いていると、こういう流れのようだ。

犬歩く　ゴブリン遭遇　ゴブリン腹減った　お前（犬）頭丸かじり

だなうん。……うん、食物連鎖って素晴らしい。いやいやいや、何だか色々と論点がずれまくり立っての！

「だーかーらー！　私は此处で終わるわけにはいかないって言うてんのよ！！　そんなにあたしの相手をしたいなら力づくでそうしなさいよ！！」

ちよ、犬さん！　ソレ死亡フラグDeathよ！？　本当に喰われちまいますよ（食物的な意味で）！？

ゴブリンはともかく、同じ哺乳類として犬さんの無残な姿はみたくないなあゝでも、ここで助けに行つて下手すりゃ俺の命も危ないからな……

そんな薄情な事を考えていると、2匹は同時に突っ込んでいた。犬（？）は自慢の牙を遣い、ゴブリンに噛みつく攻撃を繰り返している。時折、俺ほど鋭くは無いが爪を遣つて引つ掻く攻撃も織り交ぜている。また、軽い身のこなしでゴブリンのナイフを避け

ている。

一方のゴブリンはと言うと、犬の猛攻を避けつつもあの切れ味の悪そうなナイフを振り回して犬に攻撃を与えようとしている。しかし、犬の素早さが勝っているようで、致命傷を与える事が出来ずにいる。寧ろ、あの細い腕や足を犬に噛みつかれてどちらかと言うとゴブリンの方がボロボロになってきている。

どうやら、この勝負は犬の圧勝で終わりそうだ。この先に起こる事を少し予想しつつもこの場から離脱しようとする、ある一点に目を奪われた。

俺が居る場所から2匹が戦っている場所への丁度対角線上に何かが動いたように感じたのだ。

始めは気のせいだと思い、少し意識を向けるだけにとどめたが、明らかに犬がゴブリンを追いつまむたびにその動いているモノが2匹に近づいてきている。

そして、俺は見てしまったのである。その近づいて来るモノの正体を。

「（　　）　　んな！？　もう一匹ゴブリンがいやがったのか！　…
…と言う事は）」

俺はもう一度戦っている最中の2匹へと視線を向けた。

恐らく、あの犬と戦っているゴブリンは囷なのだろう。そして、本命は犬が勝利を確信した瞬間に飛び出して一網打尽にする作戦に違いない。……ややこしくなるから犬と戦っている方をゴブリンA、潜んでいる奴をゴブリンBにしよう。

それにしても悪知恵が働くゴブリンズだ。……いや、生きるために必死になった結果がこうなのだから仕方無いことだと思う。しかしだ、オメオメと俺が目の前で同じ哺乳類を殺させてたまるかっただ。

その時の俺はさっきまで考えていた『自分の命が云々』と言う事を忘れてしまっていたのは言うまでも無い。

俺は身を潜めているゴ布林Bに意識を集中した。多分、あのゴ布林Bは出ていくタイミングを見計らっているんだ。俺の勘が告げている。犬がゴ布林Aに対して止めを刺す瞬間、犬が勝利を確信した瞬間に事が起きるって……そしてその瞬間は訪れたんだ。

第三幕（後書き）

ありがとうございました。 今話は一人称に戻しました。

確認はしたのですが誤字脱字があると思いますので、見つけれ
た方はこっそりと教えて頂けると幸いです。

そして、文章の書き方……これは本当にリハビリな話になっていま
すね。今後も精進しなければ…

感想&ご意見&アドバイスはいつでも受け付けております。ではで
は、次回もよろしく願います

第四幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

第四幕

人間は少し無茶をしても……いや、猫は少し無茶をするくらいが丁度いいという事がわかった。

ゴ布林Bが犬を襲おうと茂みから飛び出てきた瞬間、俺も同じく茂みから文字通り飛び出した。

犬は突然現れた俺とゴ布林Bに驚いていたようだったが、すぐに現状を理解し、たった今相手をしていたゴ布林Aの喉に噛み付いていた。

一方のゴ布林Aはゴ布林Bが現れるのは手はず通りだったみたいだが、突然現れた俺を見て驚愕の表情をした。無理もない、この狩りは失敗。死を意味している。

そんな中で超イレギュラーな俺が現れたんだからな。

俺は犬等を飛び越えると、同じく飛びあがっているゴ布林Bの横っ面にこれでもかかって言う位の本気の猫パンチをお見舞いした。

さて、ここで一つ考えてほしい。つい先ほど俺は木に向かって軽く腕を振った際、何が起きたのかを。

……まあ、何となくは想像できるよね。そう、俺が腕を本気で振るったためゴ布林Bの頭部は、まるでハンバーグを作る時、ミンチの中に手をつっ込んだような音と共に文字通り吹き飛んだ。ソレと同時に俺の前足には肉を潰す感覚が伝わってくる。

次の瞬間、真っ赤に塗りつぶされた俺の視界、そしてドサリと音を立てながら地面へと落下していく何かが足りないゴ布林Bだったモノのなれの果て。

……考えるまでも無く、ゴ布林Bが死んだという事は理解出来た。

「以外と軟いかも？」

「キキ！？ な、何だお前は！」

俺のつぶやきを無視するかのように犬と対峙していたゴブリンAが俺に向かつて吠える。　どうやら、余りにも急な出来事だった為に、犬も止めを刺し損ねてしまったらしい。

そんな犬は突然の出来事だった為に、今迄対峙していたゴブリンから目を反らして俺の方を目をまん丸にして見ている。

「お取り込み中の所失礼しました。　それでは、続きをどうぞ」

俺はソレだけ言い残すと、その場を後にしようときびきを返した。　そういえば、初めてみたとはいえ、生き物を殺した事に関してはそれ程嫌悪感を示す事が無かったことに俺は内心驚いた。

それ以前に、ゴブリンなんてファンタジーな生物が居るという事実に驚くべきだったのだが、この時の俺にはそんな考えは微塵にも気付く事は無かった。

「キキキ！　ま、待ちやが　」

「待つのはアンタ……だつての！！」

ゴブリンAの怒りに満ちた声と、その直後に犬の声が聞こえ、直後に『　ザシュッ！』という何かを貫くかのような生々しい音と、醜い『ギャア！！』という断末魔が同時に聞こえた。　実際に視界に入っていないからどうなったかは予想でしかないが、ソレを俺は敢えて何も触れずに犬達を背にしたまま前に歩きだした。

しかし、水を飲みがてら食糧を探す筈だったのに嫌なもんを見てやっちまったな。　これからは自重しないといけないな、うん。

「ちょっとアンタ！」

まだ5mも歩いていない時、先程の犬が制止を求めるように声を発した。ソレは間違いなく俺に向けての言葉である。しかし、その声は先程ゴブリンAと話していた時とは違い、苛立ちなどは一切含まれていなかった様に感じる。

「何？」

俺はある種の賭けに出た。犬猫と言われると俺が知っている限りでは仲が悪い印象しか持っていない。まあ、例外的に仲良くしている動画はインターネットとかで見たことがあるけれど……

仮にこの犬が俺に対して友好的に接してきた場合、色々この世界の事について聞く事が出来るいいチャンスだと判断したからだ。

俺の予想……と言うよりも確信だけど、この世界は間違いなく俺がいた世界では無い。だって、喋る犬や猫、はたまたゴブリンなんていうファンタジーに満ち満ちた生物がいるのだ。

事実は小説よりも奇なりということわざがある通り、今俺のいるリアルは間違いなく奇な出来ごとに溢れている。

そんな中、世界を知るなどの情報を抑える事は生きていく上で限りなく有効な手段だ。

少しの間でそう結論付けた俺は、なるべく相手に不信感を与えないように後ろを自然な動作で振り返った。

「ウオ、近ッ！！」

び、ビビったぜ……振り向いた瞬間、俺の眼前には視野全体にどアップで先程の犬の顔が映し出されているのだから。

「……何よ、失礼しちゃうわね」

「いや、誰でも目の前に顔があつたらビビるっての」

犬に対してとはいえ、真っ先に出た言葉が『近ッ』は流石に失礼だったと思う。

俺の対応に少し苛立ちを覚えたのか、犬は俺から少し離れて怒り気味な声を出した。

「まあいいわ。取りあえず、助けてくれた事に関してお礼でも言つて………ほしいかしら？」

……はい？

「全く何よ？ 急に出てきてゴブリンを仕留めたからって良い気になつてんの？ 私は別に『助けて〜』なんて一言も言つて無いつての！ あんなのあたしの華麗なるステップで余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）で避けたわよ！ 全く、これだからケット・シーは嫌なのよね〜恩着せがましいって言つかなんというか……」

……何でか分からないけれど、ご立腹のようだし帰ろう。

イキナリそっぽを向きながら訳の分からん言いがかりを付けられた俺の心は一瞬にして、この犬には関わるなと結論を付けた。

その後の俺の行動は早く、直ぐ様犬に背を向けて猫ならではの素早さでその場から立ち去った。

未だに俺がその場から離れていくのに気付かず何かを捲し立てている様子を尻目に俺は一気にその場から離れていく。

遠くなつていく犬の姿が俺には滑稽に映ったが、そんな事を気にせずに俺は前へと進み続けた。

途中で漸く俺がその場から居なくなつた事に気が付いたようだが、時は既に遅く、俺の姿は犬からは見えない位置まで移動している。

後ろの方で何かを叫んでいるようだが、俺は敢えて何も聞こえないふりをして走る足を止めなかった。

……あ、やつべ犬つて確か鼻がきくんだよな？　だったら、俺の匂いを消しておかないと。

あのあと、俺はワザワザ遠回りをして先程喉を潤していた湖まできた。

そして躊躇なく、湖にダイプを決め込んだ。一瞬、猫つて見ずに濡れるのは苦手じゃないのか？　と言う疑問が頭をよぎったがいざ入ってみると水は冷たく、プールに入っているような感じがした。

こんな水浴びで犬の嗅覚を誤魔化せるのか心配だったが、モノは試しともことわざで言うからやるだけやってみよう。

……しかし、さっき犬が言っていた言葉が気になるな。確か『ケット・シー』だったか？　あんまり本は読まないけれど、ゲームとかの雑魚敵とかにそういった名前の魔物モンスターがいたようないなかったような……

でもって、あの犬は俺に向かってケット・シーだつてたんだよな？　……もしかして、猫じゃなくて実は魔物モンスターフラグが成立した？

……ま、難しい事はあまり深く考えないでおこう。折角貰った

セカンドライフだし、長く生きていれば自分が何者になったか位は分かるだろう。

俺はそう結論付けると湖に潜った。特に意味は無いが、何となく泳いでみたくなつたからだ。通常、猫は自分から進んで水に入る事は無い。まあ、例外として結構前に見たテレビではトラが水浴びをしている姿が映し出されていたが、ソレは本当に例外中の例外だ。最も、身体は泳ぐことに特化していないから泳ぎにくいったらありやしないけれど。

しかし、今の俺はそれを色々と無視している状況だったりする。全く、身体能力が猫以上になっていたり、4足歩行をしても違和感を感じなかったり、水に入っても大丈夫だし、極めつけは話す猫だと？

何処まで俺の体は魔改造されているんだっての。

俺は水中でそんな事を考えていた。そんな折、ふと浅い湖底に何か動く影を見つけた。一瞬『魚か？』と思つたけれど、直ぐ様それは違う事が分かった。だって俺の目に入ってきたのは……

「（蟹……沢蟹かな？ でも、少し大きい様な……）」

俺が見たものは紛れもなく蟹だった。決してザリガニやエビでは無い、沢蟹だ。しかし、そのサイズに俺は少し驚いた。あまり蟹には詳しくないし、知っていると云つても小さい頃キャンプ場の近くにあつた川で遊んでいた時に見た蟹のイメージが強すぎて、沢蟹＝小さいという図式を成り立たせていた。

しかし、今俺の目の前にいるかにはどうだろうか？ 俺に背を向けているため此方には気が付いていないであろうかには明らかに30？を超えているように見える。爪に至っては片方が胴体と同じ位巨大なのである。

その瞬間だ、俺が今迄押さえていた空腹を感じたのは。腹の虫がまるで自己主張するかのようにくぐもつた音を立てている。

そんな俺が目の中の蟹を『食べる』と言う結論付けるのに時間は必要なかった。

魚を取るのは難しそうでも、蟹ならばいくらか勝機はある。それに、湖底とはいえ、大体深さが50?程の浅い所だ。きっと頑張れば俺でもあの蟹を取る事は出来ると思う。

ただ、注意しないといけないのは明らかに凶悪そうなハサミだけだ。

その時、俺は犬に会う前に木を切り払う程の鋭さがある自身の爪の存在を思い出した。

なんて事は無い、例え水中だとしてもこの体は色々とおかしな性能を持っている。だったら、ソレをフルに活用させて貰おうじゃないか。

そうと決めた俺の行動は早かった。なるべく気付かれないように俺は一度湖面にあがり、空気を吸った後もう一度潜水をした。そして、ゆっくりと湖面を這うようにしながら蟹の背後へと近づいた。

相変わらず蟹は俺に背を向けたままである。

これは幸いと、俺は迷わずに右前足を振りかぶり……

水の抵抗はあったが俺のこの爪は難なく蟹の右側にある巨大なハサミを難なく、特に抵抗を感じるわけでもなく、まるで飴でも斬るかのように俺の爪はハサミを切り落とした

流石に蟹も俺の奇襲に驚いたらしい。しかも、武器でもある巨大なハサミを切り落とされてしまったんだ。残念ながら抗う術は無いと判断したのか、一度俺の姿を視認した後蟹ならではの横歩きで俺から逃げようとした。

しかし、そうは問屋が卸してたまるかってんだ！折角見つけた食べられそうな蟹（食材）を前にして逃がしてなるものか！

俺も当然の如く蟹を追う、先程切り落としたハサミを咥えた状態で追いかけてくる。

しかし、フィールドは水中。どれだけ身体にスペックの差があったとしても、この場合は蟹の庭と言っても良い場所だ。

結果的に俺は巨大蟹に逃げられてしまった。本当にあつという間に消え去ったとはこの事だと思う位一気に差を広げられたんだ。

最も、これが陸上だったらどうなるか分からないし、俺も息が続かなかったというもある。

俺は渋々蟹から切り取った巨大なハサミで我慢することにした。

まあ、我慢と言いながらもこのハサミ自体先程の蟹の胴体と殆どサイズが同じくらいなので、満足する事は出来ると思うけれど……そう考えながら俺は蟹のハサミを咥えたまま陸に上がった。身体を振りながらまとわりついてくる水を振り払った。

さてさて、どうやってこのハサミを食べるとするかな……蟹のハサミを地面に置きどうやって食べるのかを俺は思案した。

猫になったんだから多分、生でも食べる事は出来ると思う。だけれど、中々気が進まない。いや、刺身で食べる分には抵抗は無いけれど……なるべく初めて食べるんだから火くらいは通したいんだけど……

「ハア……」

どうするべきかを考えながら俺は軽く眼を瞑りながらため息をついた。……ん？ 何だか少しだけ辺りの気温が上がった様な気が……

俺はゆっくりと双眼を開いた。そこには……

「（パチパチパチ）……何か木が燃えているんですけど？」

一瞬、俺の目がおかしくなったのかと思った。だって、俺の目の前にある木に火が付いているのだから……だって、火の気とか全くなかったんだぜ？

なんだってイキナリ燃えて……いやいや、それどころじゃねえだろうが！

この火を早く消さないと山火事ってレベルじゃなくなるでしょうが！！

「ど、どうしよう！？ とと兎に角、水ゝそれよか氷ゝ」

その直後、今度は先程までであった木が燃える音が消えて何だか辺りが気温が急に下がったように感じる。

ふと、今しがた燃えていた木に目をやると……

「……今度は凍っているんですけれど？」

訳が分からなかった。だって、急に発火現象が起きたり、その直後に燃えていた木が冬でもないのにかちんこちに凍っているのだから……

もしかして、この世界ではこういう不思議現象が頻繁に起きているのかとさえ思った。しかし、現実的に考えて燃える事に関しては起きる可能性はあるけれど、流石に寒くも無いのに急に凍るなんて流石にある筈がない。

きつと、何かがあるに違いない。

その時だ、先程までなりを潜めていた俺の胃袋が『腹減った』と言わんばかりに自己主張を始めたのは。……まあ、難しい事は後にして取りあえず今は食べる事を優先にした方が良くかもしれない。ふと、足元に転がっている蟹のハサミに目をやった。そこには

先程の発火現象の影響であろうか、凄く良い赤色に変色したハサミが転がっている。そして、俺は躊躇せずそのハサミに殻ごとかぶりついた。

行儀が悪いつて言われても腹が減っていたんだから仕方ないじゃん。それに、色々と強化されているみたいなのこの体からしてみたらこんな殻を噛み切る事くらい難しい事じゃないと判断したからだ。まあ、結果的に殻は問題なく食べる事が出来た。それに、身の方もギツシリと詰まっっていて味も濃厚で凄く美味しかった。しかし、問題が一つ……

「……猫だからな、猫舌なのはデフォルトな訳ですか」

以前は大丈夫だった熱い物を食べる事が出来なくなっただくらいであろつか。我慢すれば食べれない事は無いけれど、結構舌が痛い位に火傷をしてしまいました。

蟹の火の入りはかなり良かったみたいだけど、こういった弊害があるなんて予想外だったな。

俺は仕方なく、早く覚めるように食べかけの蟹のハサミに向かって息を吹き込んだ。しかし、次の瞬間……

「……凍った。蟹のハサミが？」

俺の眼前には先程の木と同様に……まるで冷凍庫にほおり込んでいたかのようにカチンコチンに凍った蟹のハサミがあったのだった

「……え、俺の所為？」

取りあえず、呟かすにはいらなかった。

第四幕（後書き）

ありがとうございました。

最後の方がグダグダになってしまいました。

そして、敢えて主人公猫をケット・シーと表記したのですが、二足歩行では歩く事はありません。

この辺は追々説明を入れていこうかと思えます。

ではあり、これから応援よろしくお願いします。

第五幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

第五幕

あの時、犬が俺に向かってケット・シーと呼んでいる時から何かがおかしいと思っていたんだ。

それに、唯の猫が腕を薙ぎ払っただけで木を切り倒したり、水中に潜って活動したりして……しかも極めつけは息を吹きかけただけで蟹のハサミが氷結ですよ？　こりゃあ、さつき木を燃やしたのも俺がやったとみて間違いないかもしれない。

やあ、自分が唯の猫ではないと気づき始めた俺だ。

蟹のハサミをカチンコチンに凍らせてしまった俺は、自分自身のことについて考えたところ、俺はただの猫ではないという結論に達した。あ、蟹のハサミは凍ったままおいしく頂きました。まあ、猫舌だから熱くなければ何でも食べられるみたいです。

しかしあれだね、ゴブリンがいる世界だ、猫が火を吹いたり物を凍らせてもおかしくないのかもしれない。

……なんだかRPGに出てくる魔物を連想させるよね？

つか、確実に勇者に倒されるルートしか考えられない自分が悲し過ぎる！……考えるのはやめよう。

そんなこんなで、だいぶ話を戻すけれど蟹のハサミを食べて腹もふくれて、水で体を洗った俺は今後の事について考えてみる事にした。

取りあえずは、寝るのは今朝まで使っていた洞窟で良いと思う。

食べ物だって火を吹いたり物を凍らせる事が出来るのだから、工夫すれば何とかなる筈だ。

……え、特に問題なくね？　まあしいて挙げるのなら、凶悪な肉食獣にあって俺が御飯にならないように注意をするだけでして

その時だ、聴力が人間の数十倍になった猫になったからこそ感じられるほど小さくではあるが背後の湖から水が跳ねる様な音が聞こえたのは。その刹那、今まで感じた事がない様な悪寒が身体全身を駆け巡った。

ソレが何かと考える前にその場からサイドステップの要領で一気に横へと跳んだ。一瞬、風を切るような音が俺の耳に入ってきた。地面に着地した瞬間、俺は今まで自分が立っていた場所へと眼をやった。そこには……

『シューシュー』

俺が立っていた場所にはファンタジーな漫画やアニメでしか見た事がない様な金属製の棒が……水に濡れたソレは金属独特の茶色の錆も目立つが、生き物を殺す位造作もないであろう。

……ぶっちゃけ、剣があります。両刃剣ってやつですね。そして、その持ち主は身体全身を緑色の鱗と皮で覆われており、造形は大きなトカゲが二足歩行でもしている様なものである。

そして、何を考えているのか分からない顔が不気味さを醸し出し、瞳も縦に割れ不気味さを助長させている感じがする。……はい、どこからどう見てもイメージ上はリザードマンにしか見えません。ここにもファンタジックな生物を発見してしまったぜ……

リザードマン（仮）は耳障りな空気が抜ける音と共に口から二又に分かれた舌をチロチロと出し入れしており、何となく俺に対して威嚇しているようにも感じられた。

「って、考えたくないけれどももしかして捕食対象認定ですか!？」

その瞬間、リザードマン（仮）が剣を再び振り上げて俺の方を向いた。この場に居るのは危険だと俺は瞬時に判断し、バックステップの要領でリザードマン（仮）と距離を取った。

相変わらずリザードマン（仮）は何を考えているのか分からない表情で舌をチロチロ出し入れしながら俺の方を見ている。

何が何でもこの場から逃げなくては……つい先ほどゴブリンを一体たおしたとはいえ、あの時は滅茶苦茶奇襲だったし、しかも今回の相手は剣まで持っている。

……本当の事を言うと、俺の内心は恐怖でいっぱいだったりする。こういう時って誰かが書いた小説とかだと厨二らしく武器にもめげずに突っ込んでいくのがセオリーかもしれないけれど、生憎と俺はそこまでいっちゃっている訳ではない。

武器なんて持った事ないし、ましてや剣を持っている人外に突っ込んでいく勇氣も度胸もありはしない。

さっきのゴブリンの時の俺は絶対にどこかおかしかったからノーカンだ。

いい感じでテンパっていると、しびれを切らせたのかリザードマン（仮）が地を蹴り飛びかかりながら俺に向かって剣を縦に振るってきた。

しかし、逃げようにも俺の足は恐怖で地面に縫い付けられたように動かない。……え？　コレって何て死亡フラグですか？

しかし、身体は動かないが何故だか考える事に関しては何時もよりも冷静に出来た。多分、色々と非常識的な事を目の当たりにしたせいでおかしな耐性が付いたのだろう。

兎に角、今は俺が生き抜く事を考えなければ……逃げる事が出来そうにない以上、このリザードマン（仮）を如何にか説得して俺に攻撃させないように誘導を……

そして、正に剣が振り下ろされる瞬間、俺は賭けに出た。

「ス、ストップだったの……！」

一瞬、この世界の生き物に英語が通じるのか不安だったが俺の発した言葉によってなのかりザードマン（仮）はその剣先を俺の鼻元でピタリと止めた。

やはり、顔には表情が現われておらず本当に怖い。しかし、折角出来たかもしれないチャンスなんだから棒にふるわけにもいい。

「か、勝手に湖に入っただのは謝る。お、俺も腹が減っていてどうにも我慢が出来なくてな。で、でも生き物を殺したとかはしていないし……まあ、蟹のハサミは頂いたんだけど……い、いや、こちらら腹が減っていて見逃して貰えると嬉しかったりするなあ……なんて」

言い切ってから考えたらかなり自分勝手な物言いだったかもしれない。それに、この世界に来て犬とゴブリンには話を通じたけれど果たしてリザードマン（仮）に俺の話している言葉が通じているのだろうか？

俺が言いきっても尚、何も話さないリザードマン（仮）の様子に段々と俺は不安に駆られてきた。

そんな沈黙が数秒続いた後、リザードマン（仮）はゆっくりと口を開いた。

「……お前は我を討伐しに来たのではないのか？」

「……はい？　なんで俺が見ず知らずのアンタを倒さないといけないんだよ？　さっきも言ったけれど俺は腹が減ったからここに来ただ

けで……ソレに、もう腹が膨れたから自分の寢床に戻る所だよ」

予想外にもこのリザードマン（仮）は俺が自分を狩りに来た者だ
と思い、襲ってきたようだ。

それならば、幾分か俺が生き残る術が出来るかもしれない。

そしてリザードマン（仮）は俺の目の前に構えていた剣を治め
るが無表情ばりに申し訳なさそうな声で俺に話しかけてきた。

「すまなんだ、最近どうにも血の気の多い輩ばかり相手にしていた
ものでな……お主も同じ気質の奴かと……」

少し驚いた。背は大体150?くらいのリザードマン（仮）が自
分よりも小さい俺に向かつて頭を下げるなんて……

でも、どうやら俺が殺されるという最悪の事態は待逃れたらしい。
それに、このリザードマン（仮）って何だか話してみると結構い
い奴っぽいな。

「いや、気にしなくて良いよ、イキナリ来た俺も悪かったしな」

「うむ、感謝するぞ。 おお、そうだ迷惑をかけた礼がしたい。
何か我に出来る事があつたら言つてはくれぬか？」

おお！？ 渡りに船とは正にこの事だぜ！ まさかここに来てお
助けキャラが登場するなんて……それに、やっぱりこのリザードマ
ン（仮）は良い奴っぽいな。 いや、見た目は結構あれだけれど見
た目と中身は比例しないもんだな、ウン。

「それならさ、これからお腹がへつたらこの湖に来て蟹とかもらい
たいんだけど……いいかな？」

「おお、それならば問題は無いぞ。　なんなら我が魚などを獲って届けるが？」

おおお！？　更に良い事ずくし！　　ってかマジでこのリザードマン（仮）さん良い奴じゃなか！！

「悪い、頼んでも良いかな？」

「ハハハ、ソレ位の事は気にするでないぞ。　どうせこの湖には我くらいしか知能を持つ魔物は居らぬのでな。　お主はケット・シーであろう？　一人で暮らして居るのか？」

「まあね。　……ところで一つ聞きたいんだけど、俺ってケット・シーなの？　　ってか魔物って何？　　そもそも、ここどこ？」

何だかりザードマン（仮）さんが良い奴っぽいので俺は取りあえず、今必要な情報を聞きまくった。
何で人間だったのに猫になっているのかも聞きたかったけれど、ソレについてはリザードマン（仮）さんは間違いなく答えるのが難しいと思ったので、伏せておいた。

「ぬ？　　どうしたのだ、お主はケット・シーであろう？　　親御殿からは習わなかったのか？」

「うーん……それがさ、昨日までは話す事も出来ない猫でさ、って言うか昨日以前の記憶云々も無くてさ……ソレが今日になったら体はでかくなっているわ、話せるようになっていいるわ、力が半端無く強くなっているわでさ」

まあ嘘は言っていないよね嘘は……

そして、俺の言葉にリザードマン（仮）さんは少し考え込むように眼を閉じた。

「……恐らく、身体が巨大化し、力が強くなった云々に関しては昨晚の内に進化したのであろう」

……はい？ 進化ってあの、

「昨日まで話せなかったのであらう？ まあ、記憶云々は分からぬが何らかのショックで消し飛んだか……まあ、ソレは重要なことではない。 昨日、何か変わったことをせんかったか？」

「変わった事って……まあ、洞窟に入った位で……」

そんな俺の言葉を聞いて、リザードマン（仮）さんは無表情ながらも少し驚いたような顔をした。

「ほお、お主『試練の洞窟』に入ったのか？」

試練の洞窟？ 何だろう、凄く興味を注がれてしまうような名前が出ただけだ。

「『試練の洞窟』とはな、そのモノが心より求めるモノを具現化すると言われている洞窟だ。しかし、邪な想い（よこしまな）を持っている者が入ると、直ぐ様入口に逆戻りと言う奇妙な洞窟だな」

邪な想いって……俺はただ単に腹が減ったもんで、何か食べる物はないかと入っただけであって……それに、俺が思い描いていた食べ物は無かったんだぜ？ あったのは見たことも無い飴玉があった

だけで……

「でも、最深部にあったのって変な飴玉が数十粒だけだぜ？ まあ、全部食べたならそれなりに腹が膨れたけれど……」

「飴玉……なんだそれは？」

え、飴玉が通じないの？ 英語が通じたのに何で飴玉が通じないんだよ。

俺は少し苦笑いをして、どういう風に説明すればいいのかを考えた。

「えつとな……まんまるで、口に入れると甘い食べ物だよ」

「丸くて甘い物……それは、透明であつたか？」

何か思い当たるものがある様で、リザードマン（仮）さんは俺にそう聞いてきた。

「おう、でもな甘い匂いだったのに実際に食べてみると全く甘くねえんだぜ？ 全く、詐欺だよなあ」

「ふむ……詐欺が何かは分からぬが」

いつの間にか剣を腰に巻かれていたベルトに差し込んだリザードマン（仮）さんは手を顎に当て何かを考えるようなそぶりを見せながら話し始めた。

「お主が食べたソレは……おそらく『進化の実』だな」

「……何だか、また新しい単語を聞いた。その進化のなんちゃらって何？」

「うぬ、進化の実とは読んで字の如く進化を促進させるための実だな。その実は甘い匂いを漂わせるが無味だとかなんとか……まあ、他にも『成長の実』等と呼ばれる事もあるがな。しかし、お主はついておるな。今の時世に大量の進化の実に巡り合うとはな」

……まあ、ようはその『進化の実』って奴のお陰で話せるようになったし、力もついたって言う事か？

それって、どんなRPGだよ。

「しかし、ソレを数十個食べたと言っておったな？ どうりでだ、お主のレベルがおかしなことになっておる訳だ」

レベルねえ……それなら大体分かる。多分、俺の強さを数値化したもんだろ？ あ、でも何で俺を見ただけで分かるんだろ？

「お主の顔を見るとレベルと言う言葉は分かるが、何故見ただけで分かるのか？ と言う事でも考えて居るのである」

うへえ、何故分かったし！？

「魔物にはレベルが存在してある。表示される部位は違うがお主の場合は額にソレが現われて居るようだ。因みに、我の場合は……ホレ、この通り右肩に刻印されておるわ」

そう言ってリザードマン（仮）さんは右肩が俺に見えるように腰をかがめた。

……おお、本当だ、緑色の鱗に何だか入れ墨みたいなものが彫っ

である。……えっと、縦線が5本か。

あれ？ でもさっき自分の顔を見たけれど、俺の額って訳の分かんない入れ墨が模様のように乱雑していた気がするんだけど？

リザードマン（仮）さんの言う分にはソレが俺のレベルらしいんだが……

「我は見ているとおりのレベル5だ。しかし、お主はケット・シーであるにもかかわらず少なくともレベルが30は超えておるな」

……え、ソレってなんてチート？

リザードマン（仮）さんに冷静に返され少し現実放棄したくなったりした今日この頃である。

「……ふむ、まあ難しいことは考えなくともよい。様は、お主は望まぬままに強くなってしまったただけだ。さて、ココはどこかという問いだが」

そこまで言っただけでリザードマン（仮）さんは開いていた口を閉ざした。

一体どうしたというのだろうか？

そして、リザードマン（仮）さんはゆっくりと空を仰ぎ見て、ゆっくりと口を開いた。

「この地は『オリジン』、別名『始まりの地』とも言われている地だ」

「オリジン……ねえ、えらくファンタジックな名称なこと」

「『ふあんたじつく』というのはいかは知らぬが、お主が何も知らぬならちょうど良い。お主、我の仲間になれ」

そして、これが人間から遠くはなれた種族に生まれ変わった俺の人生の始まりになるのだ……

第五幕（後書き）

ありがとうございました。

かなり無理矢理な話になっているのですが、ご了承ください。
試練の洞窟に関する謎は後々……そして、レベルの概念も後々……
何だか後々ばかりになってしまいました。

感想&ご意見&アドバイスはいつでも受け付けております。ではでは、次回もよろしく願います

第六幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

第六幕

何やら面倒くさい事になってきたみたいだ。

やあ、いきなりリザードマンさんに仲間になれと言われた元人間、現ケットシーの俺です。

リザードマンさんによると、このオリジンは幾つかの群れが支配している地域のようでして、なんとこのリザードマンさんは湖周辺を支配しているリーダー的存在の様です！ ビックリだよね？

そもそも、このオリジンには下級魔物しか存在しておらず、レベル5のリザードマンさんは結構上位の魔物に分類されているみたいだ。……レベルが30と思われる俺って此処にいて良いのか果てしなく不安に思ってしまったぜ。

しかし、リザードマンさんが俺を仲間にしたいと思ったのは決して俺のレベルが高いからではないのだ。曰く、自分の仲間達が人間の冒険者たちに狩られたり、より自身のレベルを上げるためにほかの大陸へと向かったために段々と仲間が減っていき、気が付いたら知能を持つ魔物がリザードマンさん一体になってしまった為らしい。

しかも、最近では縄張り争い等も激化しているみたいで、今まではリザードマンさん一体でも如何にかなっていたみたいだが、今後は分からないそうだ。

その話を聞いて、俺はリザードマンさんと会った瞬間に敵意を向けられた理由も理解した。如何やら、俺は縄張りを荒らしにきた魔物と判断されたみたいだ。

まあ、そんな理由があるのなら襲われても仕方ないかもしれないな。

「という訳で、どうだ？ 仲間になつてはくれぬか？」

リザードマンさんは今この場での返答を求めているみたいだ。

仲間になるメリットを少し考えると、食料確保のパイプができるというのはおおきい。しかも、特定の団体に所属しておけば、何か有事が起きた際は、ある程度の擁護を期待してもいいかもしれない。

更に、この世界で生きるにあたっての常識諸々をリザードマンさんに教えてもらえる。

反対にデメリットは、自由に動く事が制限される可能性が高い、縄張り争いに間違いなく巻き込まれる。ってところか？

しかし、自由に動けないつつても、元々ここには詳しくないから身の振り方を覚える間は間違いなくリザードマンさんにお世話になるんだから問題にはならない。

それに、縄張り争い……さっきのゴブリンみたいに生き物を倒すのは気が引けるけれど、リザードマンさん曰く俺のレベルはこの地では最強レベルに近いみたいなので、戦いになる以前に相手側が仕掛けてくる事が無い……つまりは案山子^{カガシ}になつて周りの勢力からの牽制になればいいのだから、これも問題にはなりにくいかもしれない。

つまるところ、果てしなくメリットが大きくてデメリットが少ないと判断できるわけか。

「……ま、これから魚などを頂けるんなら是非とも仲間になりたいんだけど……それに、俺ってはこの辺に知り合いもないし」

結論として、俺はリザードマンさんの仲間になる事に決めた。

メリット、デメリット等もあるが、少しの間ながらリザードマンさんが結構いい奴ってわかったのも大きな要因だ。

俺が仲間になるという考えを出すと、リザードマンさんはあまり変化は見られないが無表情っぽい顔ながらも少し嬉しそうな表情を見せた気がした。

自分以外に知能がある魔物が居なくて話し相手もおらず、少しさみしかったと後に語ってくれた。

「そうか、ソレは良かった。……おおそう言えば名乗っておらんかったな、我はリザードマンのルジーナ。ルジーナと呼んでくれて構わぬ、これから宜しく頼むぞ」

あっさりと決めた俺に動じもせずに、リザードマンさん改めルジーナさんは先程まで剣を握っていた右手を俺に差し出した。感じとしては握手と同じだろう。

しかし、ルジーナって……女性みたいな名前じゃね？

「むう……少し失礼であるぞ。我はこう見えても雌だ！」

おっと、考えている事が口から出ていたみたいだな……って女だったの！？

話し方とか男っぽかったし、声のトーンとかも結構低めだったからてつきり男だったとばかり思っていたぜ……いやはや、ソレは悪い事をしたもんだ。

「すみませんでした、それで俺はケットシーで？ 名前が……名前が……何だつけ？」

「ぬ？ どうしたのだ？」

すこしルジーナさんが手を出したまま怪訝そうな顔をして俺の方を見てきた。でも、おつかしーな。

俺の名前だよな……えつとえと……あれ、何だったけ？

……な、何ですか！？ 大学の講義の様子とかゲームの攻略法とか初期のロツ マンのパスワードとか復活の呪文なら思い出せるのに何で忘れる筈のない自分の名前が思い出せないの！？

いや落ち着け俺、こういう時は息を整えるんだ〜ヒツヒツフ〜ヒツヒツフ〜……ってこれはラマーズ法じゃ！ ベタベタなボケかまさんでもよかー！

……うん、少しとりみだしたな。でも、おかしーな……自分の名前がきれいさっぱり思い出せん。

「名前……わかんねえ」

「名が……まあ、名とは自身を現す固有名詞だ。それほど重要視せずに自身で考えてみるのも一考ではないか？」

うわ〜お、途轍もなく投げやりな発言だぜ。でも、こんなにあっけらかんと言うのってやっぱり種族によって違うのかな？

いや、そもそもケットシーになった俺に前世での人間の名前って言うのもおかしいかな？ だったら、自分で考えるのもまたルジーナさんの言うとおり一考かもしれないけれど……

「因みに、ルジーナさんは名前ってどうされたんですか？」

「我か？ 我は元服する時に我自身で考えた」

元服とかカツコいいな……いやいや、そうではなくてだな。で

も、自分で考えたんだ……っていうか、リザードマンに元服なんてあるんだ。

いつその事、第二の人生の名前を自分で決めるって言うのも面白いかもしれないな。まあ、根本的に自分の名前が思い出せないから仕方ないんだけど……

そういや、ルジーナさんって何歳なんだろう？ ……やめとこ、リザードマンとはいえ女性に年齢を聞くのはマナー違反だな、うん。

そんな事を考えると同時に自分の名前をどうするか俺は考えた。ここで余りにもカッコよすぎる名前とかにしても、後々名前負けしたら困るし、かと言ってありきたりすぎる名前だと面白味も無いし。

自分の名前を考えていた俺はふと、ケットシーになった自分の足へと眼を向けた。銀色の毛並みが僅かにだが濡れ、ソレが太陽に反射してキラキラと輝いている。

ああ、さっきまで水に入っていたからなとつぶやいた時に、俺はハッと閃いた。そのまんまじやんと突っ込まれること請け合いだが、ある意味で今の俺にはぴったりの名前かもしれない。

その名前は……

「『ギン』……うん、俺の名前はギン。俺が決めた今決めた。……どうよ、この名前？」

俺は片方の口角をグイッと引き上げながら、軽く笑みをつくるようにしてルジーナさんを見た。

「ギンか……自身の毛色から取ったのだな？　良い名ではないのか、ではギンよこれからよろしく頼むぞ」

そして、俺とルジーナさんは固く握手を交わした。　といつても、俺は握る事が難しい足の構造をしているので、ルジーナさんが握っただけなんだがね。

と、まあここで終われば『そっか、頑張れ』ってな感じで終わるんだけど、ここで少しばかり予想外なことが起きた。

「　　漸く見つけたわよケットシー！　アンタ、私に黙ってなに勝手にどっか行ってんのよー！」

何やら、すごい形相をした先程の犬がこの少し和やかな場をぶち

壊しながら乱入して来たのだから。

……今日の教訓。

『一難去つてまた一難』という諺ことわざは以外とバカにならない。

第六幕（後書き）

ありがとうございました。

かなりグダグダ感が漂う回になってしまいましたが、ご了承ください。

リザードマンの名前に關しては察しの良い方ならば何となくわかる仕様となっております。

もし、わかった場合はコッソリと紙に書いてゴミ箱へポイしてくださいね。

感想&ご意見&アドバイスはいつでも受け付けております。ではでは、次回もよろしく願います。

第七幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

第七幕

「あのさ……取りあえず話し合わない？」

「うつさい黙れ！」

「ギン、少し黙ってもらえぬか？」

やあ、気が付いたらケットシーになっていてリザードマンのルジーナさんと仲間になりたてはやはやの俺改めてギンだよ。

今俺の前ではルジーナさんと雌の犬が激しく言い合っている最中なんだ。両者ともに、牙を光らせたり、眼光を鋭くしてなど、一触即発の状況だったりする。

……え？ いきなりすぎて分からないって？ 大丈夫、俺もどうしてこんな状況になったかは……何となくわかるね。

だったら説明しろってか？ まあ、そんな難しい話じゃないんだけれど……取りあえずは、回想シーンへ

「 漸く見つけたわよケットシー！ アンタ、私に黙ってなに勝手にどっか行ってるのよ！！ 」

事の始まりは、ギンが一匹の犬（？）を助け出したことから始まった。彼は何も考えずに手を貸してしまったようではあるが、彼女にとってはそうも言っていられない状況なのだ。

彼女のレベルはこの地では決して低くは無いのだが、この場にいます3体の魔物の中で最も低いレベル3だ。

最も、彼女はその事を知る由も無いのだが……しかし、そのレベルという概念があるからこそ、彼女はギンに対して憤怒していた。

そもそも、ケットシーという種族は元々が非力な種族であり、とてもではないが単独でゴブリンを討伐するなんてまねは出来ないのだ。

しかし、目の前にいるギンは不意打ちとはいえ、ソレをこともなげに前足を少し振るっただけで倒してしまった。

そう、簡単に言えば彼女は自分よりもレベルの低い種族が自分よりも簡単にゴブリンを仕留めてしまったという事実に対して怒っていたのだ。

至極簡単に言ってしまうば……

「なに、私より弱いくせしてしゃしゃり出てきてんのよアンタは！」

……と、言うことである。

この一方的にも聞こえる物言いにに対して当のギンは出来るだけ穏便に済ませようと考えていた。確かに、一方的な感じのする物言いに聞こえるが自分が余計な事したのは事実であり、通常ならばアレは放置するというのがこの世界での常識なのかもしれないと認識したからだ。

なので、この場で自分が謝罪をすれば事は簡単に済むと踏んでいた。しかし、それに対して納得できない者がこの場に一体だけ存在した。

「ふむ、そう言うのであればお主はギンより強いのか？」

つい先ほどギンの仲間となつたばかりのリザードマン改めルジーナその人であつた。

彼女とて仲間になつたとはいえ、当初はギンの問題にあまり深入りしないでおこうという考えであつた。

だからこそ、今現れた犬（？）には自分の縄張りに入つたことに關して追求をしなかつたし、追い出そうともしなかつた。

しかし、寛大な彼女にも許容できないことを犬（？）は口にしてしまった。

リザードマンは通常、十数体の群れで生活するのが常である。

仲間がいなくなつた彼女は例外中の例外ではあるが。

更には仲間意識というものが強く、仲間の侮辱は自分の侮辱ともつてしまう種族なのだ。

そんなおり、種族が違うとはいえ彼女にとっての唯一の仲間となつたギンに対しての侮辱ともとれる発言にはさすがの彼女も黙っていることはできなかった。

「誰よ、アンタ？」

まるで、今ルジーナの存在に気が付いたといわんばかりに振り向く犬（？）。

勿論、ルジーナは半ば無視されている状況で面白くないし、何よりも他人を見下しているその目が気に入らなかつた。

「我はお前が『弱い』などとのたうち回っておるギンの仲間だが何か？」

「へえ〜……リザードマンだっていうのにケットシーなんかと仲良くしてるんだ。
バツカじゃないの？」

その瞬間、ギンの耳には間違いなく切れてはいけない『何か』がキレてしまったような音がした。

「それに、私がそのケットシーより強いかって？ そんなの当たり前じゃない！ この世界にケットシーよりも弱いウルフがいるっていうわけよ！―」

「ほお、ウルフだったのか？ 悪いな、あまりにも大きさといい器量といい『小物』染みていたのでな、てっきり我はそこの人間に飼われている犬と思っていたようだ」

ハッハッハと悪びれた様子もなく、むしろ挑発せんとばかりな発言をしたルジーナ。すでにギンは、この場の空気があまりにも重たくなっていると悟って一歩下がって事の顛末を見守っている。

一方のメスのウルフは明らかな挑発と分かっていながらも、自身を侮辱されていると悟るや否や猛烈に反撃に出た。

「はん！ この馬の骨……ああ、ごめんなさいね『猫の骨』とつるんでいる『トカゲモドキ』に種族を見分けるなんて頭がないわねえ？ ごめんなさいね〜気がきかなくて！」

明らかに一触即発の状態である。そして、この不毛ともとれるやり取りを経て……

「ガルルルルル……」

「シューシュー……」

「……今に至るわけと」

なぜに、話の中心人物の俺をおいてけぼりにしながら自分達で話を進めているのでしょうか？

色々な意味でめまいを憶えたが、今はそれどころではない。

とにかく二人の暴走を止めなければいけない。

「はん、そこまで言うのならアンタ等のレベルを言ってみなさいっての！ どうせケットシーは1レベルでリザードマンの方は2レベルか、よくてアタシと同じ3レベルってところよね」

あ、それ死亡フラ……

そう言いながらウルフは胴体の左半身が見えるように回転した。

なるへそ、確かに胴体の左側に縦線が3本入っているな。

しかしルジーナさんには5本の線があつたし、俺にいたっては複雑な図形状態になっている。ルジーナさん曰く、俺のレベルは30レベルと言うことだから、ウルフのレベルは決して高いわけではない。

だけれど、この自慢の仕方を聞くに、3レベルってのはこの辺りではそれなりに高いのだろう。

だったら『わくスゴい』くらい驚いた方がいいのかもしれないな。それで、このウルフがいなくなるなら簡単だ。

よし、そうと決まればさっさと実行に……

「わくすい」

「

「お主の目は節穴か？ ああスマン、どうやらその目は飾りのようだ。……ギンよ、ここに居ては埒があかぬ、行くぞ」

……見事なまでに俺の作戦が爆散した瞬間であった。そして、何故かルジーナさんは俺を小脇に抱えてウルフから離れるように歩きだした。

「クッ……舐めくさって！ ……いいわよ、そこまで言うなら決闘よー！」

流石にウルフはそのまま俺たちを帰してくれるということもなく俺たちの前に回り込んで『決闘』と、なにやら物騒なことをのたうちまわっている。

ってか、このウルフが決闘って言った瞬間から何やらルジーナさんの目が先ほど以上に細くなり、マジで恐ろしいことになっているのですが、大丈夫かな？

「ほう……ガキが我に齒向かおうと言うのか？ 悪いが我は女子供でも容赦はせぬ、我に牙をむく以上はその息……確実に止めるが良いか？」

ルジーナさんは俺を地面に下ろすと、自分の腰に掛けてあるボロボロのロングソードを構えてその切っ先をウルフの鼻先へと向けた。流石のウルフも何かバイ空気を感知取ったのか、一瞬体をビクつかせたが、ここまで来てしまった以上後には引けないのだろう。

「は、はん！ アンタなんかボッコボコのギッタンギッタンにしてやるんだからね

「ケットシー!!」

「って、俺かよ!?!」

第七幕（後書き）

ありがとうございました。

今話は今までで一番短い文章となってしまいました。ご了承ください。

さて、この先々も考えているのですが……考えた話を自動で書いてくれる機会があったらほしいところですね。
マジで自分の文才のなさに落胆しまくります。

感想&ご意見は随時受け付けております。お気軽にどうぞ。

では、次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7277v/>

弱いからこそ強くなれる！

2011年10月8日09時06分発行